慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Bertha M. Clay作Between two sins翻訳（上）： 尾崎紅葉作『不言不語』の原作として
Sub Title	
Author	堀, 啓子(Hori, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1997
Jtitle	三田國文 No.25 (1997. 3) ,p.37- 66
JaLC DOI	10.14991/002.19970300-0037
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19970300-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Bertha M. Clay 作 *Between Two Sins* 翻訳（上）

――尾崎紅葉作『不言不語』の原作として――

堀　啓子

■前言

Between Two Sins は、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて米国で爆発的な人気を博したダイム・ノヴェルと呼ばれる所謂三文小説の一作である。作者は Bertha・M・Clay と言われており、その作品の多くは米国ニューヨークの出版社 Street & Smith 社によって手掛けられている。だが Clay とは架空のペン・ネームで、英国人女流作家 Charlotte・Mary・Brame を初め数名の作家達に共有されていたために *Between Two Sins* を含む多くの作品の実の作者名は未詳である。こうしたダイム・ノヴェルズは米国の出版業界ラッシュの産物として一世を風靡したが、各社が生き残りを賭けて廉価多売を目指したため、あらゆる管理が極めて杜撰であり、著作権や版権を度外視した重版や海賊版が出回り、各作品の初版年、出版社、作者さえも不明であるケースも珍しくはない。これらは程なく日本にも輸入され、中でも New York の Munro 社の Seaside Library Series 及び Lovell 社の Lovell's Library Series は数も多く話題を集めた。

ここでとりあげる *Between Two Sins* はこれらのシリーズに於いて明治前期に日本の書店に並べられたと思われるが、尾崎紅葉の作品『不言不語』（明治28『読売新聞』連載）について、宮崎湖処子が書評「不言不語を読む」（『国民之友』M28・3）の中で指摘している事実「聞く是はかの『谷間の姫百合』の作者の作を翻案したるもの〻由」を鑑みると両者の比較は極めて興味深い。その筋の酷似を基に、拙稿「尾崎紅葉「不言不語」と原作者 Bertha・M・Clay」（『文学』1997春・岩波書店）に於いて *Between Two Sins* を『不言不語』の原作と措定したが、ここではその原作の全訳を紹介しておきたい。本誌次号とに分載し、本稿では前半を掲載する。

底本は Street & Smith 社の New Bertha Clay Library No. 120 に拠ったが、他に Seaside Library Series パンフレット版 No. 1460 を参考にした。共に正確な出版年は定かではない。

尚、英文の古典的表現については E-mail を駆使して御教示を賜った *Dime Novel Round-Up* 出版編集長 Randolph Cox 氏に予め感謝申し上げたい。

■*Between Two Sins* 翻訳

第Ⅰ章

多くの家庭に幸福をもたらしたはずのそのクリスマス・イヴも、私にとっては長くつらい旅と新たな境遇でしかなかった。と言うのも、私は遙々ロンドンからこの湖の地方に旅してきたからだった。ウラメールの駅に着いた時、寒さと凍結で私の感覚は麻痺していた。

明らかに列車の到着時間に手違いがあったらしく、私のために迎えに寄越されていたはずの馬車はまだ姿を見せなかった。駅は小さく、人影はまばらだった。風は建物の周りで陰鬱に泣き叫んでいた。駅から道へとつながっているアーチ型の道は真っ黒な口を開けた底なし沼のようだった。どんなことでもそこにじっとしているよりはましだったので、私はウラメールへの道に歩を進めることで待ち時間をつぶすことにした。遠くに美しい町並みが見え、高く白い教会の尖塔が突き出していた。丁度その道の終わりまで来た時、雲間から月が現れ、雪に覆われた景色に銀の光を投げかけて、その美しさを一層際立たせた。私は側の柵に凭れてそれを眺めた。月光が白い尖塔や、雪に覆われた牧場や遠い家々に口づけていた。むき出しの垣や木々の枝にはダイヤモンドのように輝く氷柱が下がっていた。柊に赤い漿果が輝き、高い鬱蒼としたもみの木が勇ましくそびえ立ち、夜空には星が輝いていた。

ああ、なんと美しいクリスマス・イヴであろう！鐘が鳴り始め、その優しく甘い響きが雪をついて耳に届いたとき、何かが心をかき立てて私の目には涙が浮かんだ。クリスマスの月が差し込む幸福な家庭、愛情深い夫妻、優しい両親に、学校から帰省した楽しげな子供達、幸せな恋人達や思いやりのある友人達に私は想いを馳せた。私は空を見上げ、自分を愛してくれる人が現れるよう神に祈った。クリスマスの時期には誰もが望む贈物を、私も神にねだったのだ。これが私のクリスマス・イヴの祈りであり、それがどのように叶えられたかがこれからの話となる。

時計が丁度時刻を知らせたので駅に戻ってみると、私がいない間に馬車が到着していた。私がホームに上っていくと、駅者は帽子に手をやった。辺りには他に人影もなかった。「ウラメールからミス・フォスターのお迎えに上がりました」と彼は言った。数分後、私は車上の人となり屋敷へ向かっていた。星が私の新たな生活を照らし、雪が縁どった木々の枝が私を招いているかのように思われた。クリスマス・イヴにこの静かな地方をたった一人馬車を駆っていくことに私は運命的なものを感じた。月は白く明るい光に輝いていた。美しい公園を走り抜けた。木立の下を流れる水は完全に凍り、常緑樹がくっきりと立っていた。大きな木々をかき回す風が不思議な旋律を奏で、まさにクリスマスの精霊が辺り一面に存在するかのようだった。急な勾配、未凍の湖の水のさざめき、驚いた鳥の叫び、犬の遠吠え、そして私達は胡桃の細い並木道を走っていた。上品な大きな建物が月光に露になった。その頃の絵を今、見ている。ウラメールは壮大で端麗な住居で、柱を通した玄関とバルコニー、荘厳な翼から成るイタリア式の建築であった。芝生のスロープが湖

のすぐ端まで続き、先程公園が館の裏手にあった。どの窓にもほんの僅かな灯りも見えず、全てが暗鬱であった。その前に降り立ったとき、この館にはある秘密が隠されているという思いが漠然と私の心をよぎった。呼び鈴に最初は誰も応えることなく、もう一度鳴らすと大層用心深くドアを開けたように私には思われたが、灰色の髪の老人が現れた。大きなエントランスホールには緑の木も、灯りも、やどりぎの小枝も全く見あたらず、ただ陰鬱さと深い影が満ち満ちていた。ホールの奥のどこかで小さな明かりが瞬いた。私は微かに寒気を覚えた。「ミス・フォスター」とその執事が呼びかけた。「奥様がお待ちでございます。こちらへどうぞ」

彼は私を、火が勢いよく燃え、テーブルの上に明かりが灯されている書斎へと導いた。十二月に咲く薔薇でも探すほうがましなほど、クリスマスらしさは薬にしたくとも無かった。「おいでになったことを奥様にお話して参ります」と彼は言って出て行き、私は一人取り残された。なんと静かな館であったことか！その静寂を破るものは何もなく、ドアを開け閉めする音さえしなかった。静寂は次第に濃密に広がり始めた。館は、ある罪の意識に満ちているように感じられた。私は灯りを振り向いた。端正な大理石の彫刻や綺麗に整理された本棚、どっしりとした青銅の装飾品、数点の選りすぐりの絵画に光が当たっていた。

やがてドアが開き、あの灰色の髪の執事が「奥様です」と告げた。絹のドレスの衣擦れの音が聞こえ、ヘリオトープの微かな香が漂ってきた。その時の彼女の姿を、私は死ぬまで忘れないだろう。彼女は落ち着いた、優雅な物腰で入ってきた。そのドレスはたっぷりとした深紅のベルベットで出来ており、繊細なレースが白い肩や丸みを帯びた腕を包んでいた。彼女は女王のように美しく、そんなことがありうるとして、その表情は何かを物語っていた。彼女の表情のうちには異常な人生から来した力、情熱、過度の抑圧そして苦悩と恐れが読み取れた。そんなにも美しく、しかも不思議な顔を私は一度も見たことが無かった。奇妙なことに、話したり微笑んだりしない時には、その唇は次第に青ざめるのだった。にこりともせず、またその目に歓迎の色を浮かべることなく、彼女は手を差しのべて歩み寄ってきた。美しい大理石の像のようであったが、その濃い青の瞳にはなんと深い感情が横たわっていたことか！「長くて寒い旅でしたわね、ミス・フォスター」と彼女は言った。「八時なので丁度お茶を飲むところです。ハーパー夫人が部屋に案内しますので、その後でご一緒しましょう」

どうしたことか、私は目に一杯涙を溜め、その顔を見上げて言うことを止められなかった。「ここはクリスマスらしくありませんわ」もし、沢山のとげのある、心臓を貫く矢のような言葉を放っていたとしても、それ以上に彼女を驚かすことはできなかったであろう。恰も長い間失われていた声が彼女に呼びかけたかのようであった。「今夜はクリスマス・イヴなの？忘れていたわ」と、彼女は答えた。「クリスマス・イヴを忘れていたですって！」一体どういった女性なのかと訝りながら私は叫んだ。「何故ですか。世界中の人がクリスマスを記憶していて愛しているのに」と私は続けた。「嘗ては私もそうだったわ」と彼女

は答えた。「じゃ、何故今は違うんですか?」恐らくは性急過ぎたであろう言葉を、私は考えもせずに口にしていた。「今?」彼女はゆっくりと応じた。「ああ、今はまるで違うわ!」私にどう答えたら良いのか分からず、彼女は当惑したようだった。そして私の頬を流れ落ちる涙を見て、こう付け加えた。「楽しく過ごしてね。来てくださってありがとう。ウラメールはとても美しいところだけれど、随分退屈なところなの。」話している間、彼女は震えていた。その声はとても美しく、よく通ったが、望みや愛について語る甘い抑揚を悲しいほどに欠いていた。私は殆ど彼女を畏怖していたように思う。私の涙がまだ止まらないのを見て彼女は「長旅でお疲れなのでしょう」と言った。「ええ。でも泣いているのはそのせいではありません。イングランドのクリスマスはとても美しいものだと思っていました」と私は答えた。「ええ、そうよ。」白い手を握り締めながら彼女は答えた。「でもここでは…ここでは違うわ。私達は忘れていたわ。さぞかし奇妙に思われるでしょうね。」イングランドのクリスマス・イヴについて、柊ややどりぎやクリスマスの飾り付けについて私はとても美しい話を読んだことがあった。私は雪で縁どられた木々の下の垣の傍らでの祈ったことを思い出した。

衝動的に「私はクリスマスの贈物を願いました」と私は言った。「何を望んだの?」と彼女は尋ねた。「青い空や星を眺めながら、クリスマスの贈物として神が私を愛してくれる誰かを与えて下さるように祈ったのです。」「貴女を愛してくれる人ですって!」彼女は鸚鵡返しに言った。その顔は紅潮し、目は輝き、手は震えていた。「そんなことならむしろ貴女の心臓を貫く剣か、致死量の毒を持つ蛇、貴女を打ち殺す雷光を望みなさいな。でも、決して貴女を愛する人、そして貴女が愛しうる人を望んではなりません。」そして次の瞬間、彼女は姿を消した。

優しく暖かい女性だと後に知ることになった家政婦のハーパー夫人が数分後やってきた。「お部屋にご案内致しましょうか。さぞや、お疲れで凍えてらっしゃるでしょうね」と、彼女は尋ねた。冬の風が私の身体を刺し通し、手は凍えていたが、心は更に冷えきっていた。私が発ってきた楽しく、陽気なフランスが恋しかった。私達は曲がりくねった回廊を歩いていった。ハーパー夫人が手にしていた蠟燭は暗闇を一層濃いものにしていた。風は断続的な唸りをあげていた。「なんて陰気なお館なのでしょう!どうして灯りを灯されないのですか?」と私は我知らず叫んだ。「ガス灯はウラデールより近くには来ていないのです。そしてそこは5マイルちかくも離れています。それに、灯りを灯さないことをどなたも気にしませんよ。」「誰も気にしないですって!」私は繰り返した。「なんて奇妙なことでしょう!人は皆、家を活気あるものにするのが好きなのだと思ってましたわ。」「世界中のガス灯にそれが可能だとしても、この家にだけは活気を与えることはできません。ここは影に覆われているのです」とハーパー夫人は言った。「何の影ですか?」と私は青ざめた顔で鼓動を速めながら尋ねた。「誰も知りません。見たり感じたりすることは出来ますが、私にはそれが何なのかお話することは出来ません。貴女はお若いわ、ミス・フォスター、明るく振る舞うべきです。この陰鬱さに圧しつぶされてはなりませんよ。あれは、お茶のベルですね。」私は質素で地味な、手

持ちの僅かなドレスを眺めた。「この中の一着で階下に降りるのは気がひけますわ。どなたかお客様がみえますか？」と私は言った。彼女は陰気に笑った。「お客様ですか！いいえ、ここには殆どどなたもみえません。」「でも奥様はとても華麗に着飾っておいでしたわ！」と私は叫んだ。「国中で、うちの奥様ほど美麗に着飾れる方はありません。でも、奥様はそのために着飾っているものを決して手にいれることは叶わないのです…決して」と、私をまっすぐに見て彼女は答えた。私は簡素な黒い絹のドレスと柊の実を取り出した。「お館中の人がクリスマスを忘れてしまっていても私は忘れません！」と私は言って柊の赤い漿果の小枝を髪とドレスの前に飾った。

数分後、胸の鼓動を高鳴らせて私は客間のドアの前に立っていた。辺りには死を思わせる静寂が充ち、戸外では風が唸りをあげ、影は深まって私を取り巻いていた。私は勇気を出してドアを開け、威風堂々と美しく装飾を施された素晴らしい部屋に入った。天井には絵が描かれていた。素晴らしい絵画や、珍しい像、〝観葉植物〟があり、高価な異国風の高級家具で埋め尽くされていて、全てがとても魅惑的な部屋をつくりあげていた。部屋には蠟燭が灯されていた。奥様は赤々とした火の前に座っていた。「お入りなさい、ミス・フォスター。お茶が待遠しかったでしょう」と彼女は言った。居心地の良い小さなテーブルが火の側に引き寄せられており、セーヴルのカップやソーサーが銀の茶道具と共にその上に据えられていた。私が座ると、奥様の脳裏からは私のことが全く消えてしまった。彼女は繊細な羽の扇をその白い手に握り、座ったまま火に見入っていた。彼女は明らかに、私には見えない絵を炎の内に見、私には読めない話を火の内に見いだしていた。少しの間があって、使用人が銀の台と薬罐を持ってきてテーブルの上に置いた。「ルドルフ卿がお見えです、奥様」と彼は言った。彼女のことを冷淡で情感の無い女性と思っていた私は間違っていた。彼女の表情は一変した。唇の青白さが消え、石の仮面が滑り落ち、いきいきとした魅力的な女性の紅潮した情熱的な美しい顔が現れた。胸の動悸をしずめるように彼女が片手を胸に当てたことに私は気付いた。私はその目の中に見て取れたほどの痛み、熱情、渇望を嘗て見たことが無かった。

再びドアが開き、ルドルフ卿が入ってきた。彼女に驚いたあまり、私は最初彼の方を見ることも忘れていた。彼女の表情は、蛇に最初に見竦められた時の、怯えた鳥の目に浮かぶ苦悩を彷彿とさせた。それでも、彼女の目の内には愛の…口には出来ない、絶望的な愛の光があった。だが彼が話し出すと、私は彼の方を眺めた。彼は典型的な美男ではなかった。だが、一度見たら忘れられない顔をしていた。姿勢が良く、肩幅の広い、真のイギリス人男性らしい筋肉質の四肢の長身の男性であった。その顔の主な魅力は口元と目にあった。その口は優しげで誇り高く、引き締まり、その優雅なラインは濃い口髭にも隠れてはいなかった。言い表わすことのできない美と力と悲哀がその瞳に浮かんでいた。その目が私を見た時は優しく澄んで明るかったが、奥様を見る時その目には嫌悪と怯えが見て取れた。旦那様は私に手を差し伸べ、ウラメールへの歓迎の意を表した。彼の挨拶は奥様のそれよりも何千倍も心がこもっていた。私が退屈

しないように望んでおり、彼自身は読書や舟、釣り、丘をぶらつくことに時間を費やしている、と彼は語った。そして彼が話している間中、その妻の怯えた鳥のような目はひたと彼に当てられていた。私達は座っていたが、もし一幕芝居だったとすれば彼ら二人の様子はその後の二人を表象するものであった。豪奢な部屋や蠟燭の青白く明るい光、絵画や像を舐め尽くすかのような炎の輝き、温室植物の花と香ーその情景全てが私の目にはっきりと浮かぶ。奥様の高価なドレス、宝石や美しい顔、旦那様の黒い頭部と高貴な顔を炎の光りがどのように照らし出したか、私は決して忘れることはない。彼女は旦那様の歓心を買うために高価な衣装や宝石で身を飾ったのだろうか?もしそうなら、全くの骨折り損であった。最初にチラッと見ただけで、彼の視線は注意深く彼女を避けていた。私にははっきりと分かった。それは不注意な無関心というものではなく、意図的に視線を彼女から外している類であった。私に話しかけるとき、彼の視線は率直に表情豊かに私の目に当てられた。奥様が彼に話しかけた時、彼の視線は彼女以外の別の何かにじっと注がれていた。

お茶が進むにつれ、私の驚きは膨らんでいった。旦那様が奥様に話しかける時は無意識のうちに抑圧された冷たい声になり、奥様の声には無意識のうちに哀願の調子が生まれるようだった。彼らの間に会話が交わされることはなかった。情熱と懇願と愛の輝きを込めた目で自分を見つめる美しい女性に対して、旦那様が礼儀や配慮を欠いていたとは言えなかった。だが彼は必要最小限の、対応をしただけであり、それ以上のことはなさなかった。私が間違っていなければ、多くが表面には表れなかった。単に嫌がると言う以上の凝縮された嫌悪感、彼のほうには嫌忌の情さえ見受けられた。一方、彼女の方には、情熱的な懇願に込められた痛みがあった。ひっくるめて、秘密の匂いが感じられた。館の陰鬱さ、壮麗な部屋を支配する静寂、夫婦間の奇妙な様子といった全てがそれを確信させた。ある些細な出来事がひどく印象に残った。奥様はとても素晴らしいダイヤモンドの腕輪を着けていた。石の一つを押さえていた金が少し壊れ、彼女の腕を傷つけた。彼女は突如、痛みで小さな叫び声をあげ、夫の側に寄った。「ルドルフ、この腕輪をみてくださるかしら?」と彼女は言った。そして何故彼がその場で彼女を抱き締めて、その愛らしい嘆願を込めた顔にキスしないのか不思議であったほど愛情に溢れた瞳で彼を見た。彼女は美しい丸みを帯びた白い腕を彼に差し伸べて壊れた金具が拵えた小さな赤いしるしを見せた。そして彼女の手が彼に触れた。偶然であったと思う。だがその出来事を忘れることは出来ない。一瞬の間であったが、その間の光景は恐ろしいものであった。彼の顔つきが変わり、その目を激しい怒りが彩った。彼は恰も毒蛇であったかのように、その白い腕を振り払った。「忘れたのか!」彼の声だとは思えない程、彼は冷たく厳しい声で叫んだ。ぞっとし、血の気が引いて震えながら彼女は彼から身を引いた。「おやすみなさい、ミス・フォスター」と、彼は唐突に言った。「出来るだけ楽しく過ごして下さるよう願っています。」彼は私に何も答える間を与えずに出ていった。

奥様は数分の間じっと立ちつくしていた。そして髪と首と腕

から宝石をむしり取って床に投げ付けた。「彼が私を見てくれないほど、私が彼に触れられないほど、そんなにも私は嫌がられているの、ぞっとさせているの?ああ神様、私はあんなにも嫌われ、憎まれる者なのでしょうか?」急に彼女は私が居ることを思い出したが、私を見た優しい、激しい絶望の眼差しは私の心を打った。私は床に散らばった美しい宝石を拾いに行った。きらきらした美しい塊を私はテーブルの上に置いた。彼女は少し含羞んで近づいた。「私はなんて取り乱してしまったのかしら、ミス・フォスター!なんてお思いでしょうね?」彼女は言った。「考える時間なんて全くございませんでしたもの」と、私は答えた。すると、彼女は大きな鏡の一枚に歩み寄りその前に暫く黙って立っていた。長いこと熱心に自分自身を見つめた後で、彼女は「ミス・フォスター、こちらへ」と言った。私は彼女の側に行き、私達は並んで立った。彼女は批判的に私を注視した。「貴女は美しいわ」と、彼女はゆっくりと言った。「肌は明るいスペインの娘のように浅黒く、瞳は黄昏色のベルベットのようにーいいえ、紫菫のようだわ。でも、貴女は私ほど美しくはないわ。」彼女は激しく私を振り返り、私の両手をグッと摑んだ。「教えて」彼女は叫んだ。「考える時間はあったでしょうー教えてー私はどんな男性にも愛されないような女なの?」「いいえ」私は彼女の奇妙な振る舞いに半ば怯えながら答えた。「私の腕を見て」と、彼女は続けた。「もし他の男性だったら、傷に口づけして彼自身で腕輪をほうり出してくれたでしょうに!」私が答える間もなく、従僕がテーブルを片付けに来、私は自分の部屋にさがった。

第Ⅱ章

何というお屋敷に、何という人々であろうか?この屋根のもとにどんな間違いがあったのだろうか?活気にみちるはずの家全体を覆い尽くしたこの影は何なのか?私は初め疲れていたはずだが、この神秘と奇妙な出来事はあまりにも刺激的で大きな驚愕をもたらしたので落ち着くことも眠ることも出来なかった。私以上に不思議なクリスマスをおくった者は無かったであろう。私はこの問題を脇に寄せた。ああ、この戸外にはクリスマスの夜空や輝く星の美しい、甘く白い世界が広がっているのだ。ここでは真夜中まで鐘が鳴り響くことは知っていたが、鐘の音は聞こえて来なかった。その音楽がどのように舞い上がり、木々に降り注ぎ、雪の上で消えゆくか私には分かっていた。私の想いがそれほど深くウラメールのこの神秘にとらわれていなかったなら、自分の孤独に本当に絶望的な哀しみを感じて私は泣いていたであろう。夫人の美しい顔と卿の高貴な顔に思いを馳せ、どんな影と悲哀が彼らの間に横たわっているのか訝りながら、私は遂に眠りにおちた。

クリスマスの朝は晴れやかに美しく明けた。私は窓辺に寄り、驚きと喜びを以て表を眺めた。一面にアラ湖と知られている湖とその水際までなだらかに続く地所が見えるばかりであった。それは美しい湖で、夏には睡蓮が静まり返り、葦や菅が土手に生え、木々の小枝が多くの箇所で水に浸されていた。大抵の種類の木が生えていたー銅色や銀色の葉を持つぶなや、威厳のある樫、優美なシナ、震えているポプラ、枝を拡げた胡桃、

圧巻は古い杉の大木であった。白い雪の覆いに陽光が降り注ぎ、その光景を大層際立たせた。駒鳥が食物を求めて飛び交い、すいかずらは満開の花をつけていた。私の気分は高揚した。こんなにも美しい世界の全てが、ただ人間や罪科によって損なわれるような悲劇であろうはずもなかった。クリスマス・イヴが忘れ去られていたとしても、キリスト教徒なら間違いなく彼らもクリスマスのことは思い出すであろうと、考えながら私は階下に下りた。だがまたもや、なんの兆候も一柊もやどりぎも賑やかな声も笑いもクリスマスの挨拶も一無かった。前夜と同様、館は朝日の光のように静かであった。朝食は食堂に用意された。だが、ルドルフ卿もその妻も下りては来なかった。年老いた執事がルドルフ卿の朝食は彼の書斎に用意され、夫人は自分の部屋で朝食をとるのだと話した。状況を受け入れて一人で朝食をとりながら、クリスマスの朝に長らく離れていて再会の喜びと愛に満ち溢れた沢山の幸福な家庭を夢見る以外に私はどうしようもなかった。陽光がこの憂鬱な家の影を深めないでいる間に、私の生い立ちについての簡単な話…どのようにして、何故、ウラメールを訪ねて来たのかを、お話できるだろう。

私の母メーベル・アヴェリールは名門の出であった。大成し名声を勝ち得ることを夢見ていた若い芸術家のアリック・フォスターという、自分の絵画教師と、彼女は十七歳になる前に駆け落ちした。彼女の家族は決して彼女を赦すことなく、私の父は彼女をパリに伴った。そこで彼は長い間根気強く頑張った。彼の成し得た最高の業績は、シャンゼリゼーに大きな上流の学校を持っていたマダム・デュドゥヴァンの学校の生徒達の絵画教師という職にありついたことであった。彼は私が四歳の時、突然熱病に倒れて亡くなった。そして親切な心の持ち主であったマダム・デュドゥヴァンは私の母のために、彼女の学校に英語教師の席を用意してくれた。私の学歴は彼女に負うところが大きく、実際私は最高の教育を受けた。もし私が貧乏な英語教師の娘でなく、貴族令嬢であったとしてもあれ以上には出来ないほど彼女は私によくしてくれた。パリでは下宿住まいだったので、家は要らなかった。私が十八になる少し前に母が亡くなり、多くの辛い思い出に充ちたその場所に私は堪えられなくなった。マダムはとても親切だった。私が辛い思いをしていることを話すとイングランドに職を求めることが一番良いだろうと話してくれた。フランス語、ドイツ語、イタリア語に堪能でそれら三国の文学にも精通している若い女性を求める広告にマダムは応じた。その女性には優れた音楽の素養と上手な歌い手であることも求められていた。待遇はとても良く、非常に静かだが快適な住みかも提供されていた。「このお仕事がもらえれば、とても運がいいわ」とマダム・デュドゥヴァンは言った。事実、多くの点で本当に恵まれていた。年俸は百ドルで、職掌はウラメール在住のランカシャー地方のブルックのルドルフ卿の妻レディー・カルモアのお相手であった。マダムは大いに祝うべきことだと考え、私は愛するイングランドを見る機会が与えられたことをひたすら喜んだ。マダム・デュドゥヴァンと彼女の学校、明るく陽気なフランスに別れを告げたのは十二月二十三日である。十八歳になったのもその十二月であった。私の生活体験は寄宿学校だけに限られており、他で生活したことも

無かったので、既婚者というものは皆大層幸せなものだと漠然と思っていた。私の出会ったことのある男性たちは学校の教師と寄宿生の父兄だけだった。

若く、経験も積んでいなかったので、私は夫妻の館で自分が出会ったことはまさに悲劇だという思いに捕らわれてしまった。ハーパー夫人が入ってきて奥様は体調が思わしくないのでしばらく階下にはお見えにならないが、お望みなら馬車を使ってウラデール教会にいらしてもよい、と話した。「ハーパーさん、他に誰も教会を訪ねないのですか?」私は尋ねた。「ここからはどなたも教会には参りません」と、彼女は悲しげに答えた。「国中でこんな家は殆ど見あたらないでしょうけれどね、ミス・フォスター」まさにその通りだと私は思った。教会に赴くことがどれほど嬉しいか私は彼女に話した。柊や雪の間を日の光を浴びて出かけることを思うと楽しかった。遂にクリスマスの鐘の音を耳にしたとき、私の目には涙が浮かんだ。緑の木が無いところは教会中何処にもなく、至る所埋め尽くされていた。もう一度私はクリスマスの贈物をー誰かが私を愛してくれるように、と願った。跪いている間中、誰も教会を訪れることなくクリスマス・イヴを忘れ去っている、あの陰鬱な館のことを思っていた。

礼拝が終わって帰路についた時、私は英国の教会を初めて訪れたことで気分良く明るくなっていたが、ウラメールに近づくにつれて再び影が私に覆いかぶさってきた。館に戻った時、旦那様は不在で、奥様が彼女の私室で私に会いたがっている旨を執事が告げた。その私室は客間の並びの美しい小さな部屋で湖が右手に一望できた。内心の好奇心を表に出さず、私はすぐに彼女の許に赴いた。彼女はとても大人しく、悲しい青ざめた顔をしており、明らかに前夜の感情の激しさで憔悴していた。彼女はすらりとした優雅な姿を最高に引き立てる紫のベルベットのドレスをまとっていた。前夜と同様、彼女の顔は死人のように青ざめて目には自制と恐れと渇望の奇妙な表情があった。彼女はすこし縋るように私に腕を差し伸べたが、後で気付いたことだが自分に親切な人には誰にでも彼女は縋り付くのだった。「教会に行ってきたのでしょう」微笑みながら彼女は言った。「クリスマスらしさは何か見つかって?」「とても美しいクリスマスですわ」と、私は答えた。「私が夢見た通りー沢山の柊、月桂樹、やどりぎがあって。それに私はクリスマス・キャロルを聞くのが大好きなんです。」「私はとても長い間教会に足を運んでいないの。礼拝がどんなものだったか忘れかけているわ」と彼女が言った。「教会に行かないことは残念だと思われませんか?」私は思い切って尋ねた。「問題が肉体にあろうと精神にあろうと、いつも快い場所ですわ。」「私には意味が無いわ」彼女は言った。「全く無意味だわ。」「でもどうしてですか?」私は尋ねた。返事をした時、彼女は青ざめていた。「人に赦せないことが、どうして神に赦されて?」「逆ではありませんか。」私は答えた。「神のお赦しがあれば人の赦しはどうでもいいことです。でも奥様…まあ奥様にしては何ておかしなことを仰言るのでしょう?そんな赦しが必要になるどんなことを貴女がなされましょうか?」それはとても不躾な言葉で、もし考えることを止めていればそんなことを口走るはずはなかった。だが彼女は気

を悪くはしなかった。握りしめようとするかのように彼女はかすかに手を動かし、顔を背けた。「奥様」と、私はすぐに言った。「少しお時間を頂けるならば私の仕事は何か教えて戴きたいのですが。今のところ私は奥様に何もして差し上げておりません。」「貴女の仕事…私の相手としての仕事?私に話し相手が必要だと言ったのは旦那様なの。私には分からない。彼は、私が誰か一緒にいてくれる人を欲しがっていると思ったのでしょう」と、彼女は上の空で答えた。「どんなお役に立てるでしょうか?」私は尋ねた。「分からないわ。私がひどく落ち込んでいる時、慰めてくれる?」と、彼女は答えた。「出来るだけのことはやってみますわ」と私が答えると、「私はやすらぎが欲しいわ…いつだってやすらぎが。」と低く呻きながら彼女は顔を背けた。

第Ⅲ章

ルドルフ卿のお館の惨めさはとても言い表すことが出来なかった。館を覆っている影がどんなものか私には想像がつかなかった。夫妻はともに若く美しく、天が授けうる贈物の殆ど全てが与えられていた。私の知る限り、彼らの幸福を完全なものにするのに欠けたものは何もなかった。それなのに彼らは、死が二人の間に横たわっているよりも何千倍も遠く隔たっているように思えた。私がイングランドで過ごしたあの最初のクリスマスの日のことが私の記憶から消えることは決して無いだろう。私達は夕食の時間…七時まで旦那様の姿を見ることは無かった。そしてそこでクリスマスの晩餐としての七面鳥とプラム・プディングという形で、クリスマスを重んじるべきだという私の忠告が料理場に受け入れられたことを知った。無分別な感激の瞬間に誰かがつやつやした二三枚の葉に赤い漿果のぱらついた柊の可愛い小枝をプディングの上に飾った。旦那様はそれを見て、執事を振り向いた。「これは何だ?」と彼は尋ねた。「柊です、旦那様。」と執事は答えた。「それでどうしてそれがここにあるのだ?」と、彼は続けた。「私が思いますに…おそらく…クリスマスだからでしょう。」と、執事は吃りながら言った。「取り除けなさい!」旦那様は厳しく命じた。真っ赤になってひどく狼狽しながら執事は哀れな柊の小枝を取り除いた。旦那様の表情は「私には喜びは無く、この家にも喜びのしるしは許さない。」と、はっきりと語っていた。そうしてウラメールでのクリスマスは過ぎた。夫妻を観察していたが、私はこれほど当惑したことはなかった。不一致の原因が私には全く理解できなかった。旦那様が狭量であんな顔をするはずはなかった。それは誰にでも分かった。何らかの深い感情が彼をつき動かし、時々彼を支配するのだった。

どんな男性でも魅了するほど奥様は美しかったが、旦那様には明らかに何の魅力ももたなかった。その秘密が何であれ、彼が他の誰かを愛しているということで無いのは明らかだった。彼には何か非常に真摯で高貴なところがあり、彼が何か過ちに関わっているなどと疑うことは誰にも出来無かった。彼は、彼を愛する女を狂わせるような、氷のように冷たい丁重さで慇懃に妻に接した。彼は妻に無駄口はたたかなかった。夕食をとる時は彼が主人役を務めた。相伴を頼んだとしても、彼女が拒めば無理強いはしなかった。彼は再び頼むことは無かった。頭を

下げることやその他の身振りが言葉の代わりになる時は、それが示された。ちょっとした気遣い、例えば椅子や足置き台を置いたりすることは、何もしないよりも悪いかたちで儀礼的に冷ややかになされた。彼は彼女と一緒に出ていくことは無かった。彼も彼女それぞれに足を向けた。彼は彼女の趣向に水を差すことは無かった。奥様が何かを尋ねると、彼は出来るだけ短く答えた。彼が批評や提案をすることは無かった。事実、墓のような広く深い割れ目が彼らの間に横たわっていた。だが奥様は激しく情熱的に夫を熱愛していた。彼を愛するあまり、彼の足音や声に震えていた。彼女の目はいつも懇願と痛みと情熱がいっぱいに湛えられていた。彼がいない時、彼女は激しく煩悶した。彼が居る時はそれ以上に苦しんでいた。ある時は希求の苦悩であり、またある時は心痛の苦しみであった。それは嘗て誰も足を踏み入れたことが無いほど奇妙な家であった。旦那様は西翼を占めていた。書斎、化粧室、寝室、銃器室の全てがそこにあり、公園を一望していた。奥様の空間は東翼にあった。一、二室の整然と整えられた応接間続きの大きな客間や食堂は建物の中間に位置していた。

彼らはその、言わば中立地帯で顔を合わせ、他で出会うことは無かった。伝言が交わされることは無かった。かろうじて生活の一般的礼儀を交わしつつ、完全な他人として彼らは生活していた。全く風変わりな夫妻だ！そして彼らを取り巻く憂鬱は周囲にも広がっていた。使用人達が微笑むことはまず無かった。彼らもまた[1]秘密の重みを感じているかのように沈鬱な、抑えた表情や動作で動き回っていた。日曜の朝だけは皆で朝食をともにした。それは大層厳かでしめやかな行事であった。週日は旦那様と奥様は夕食まで決して顔を合わせなかった。彼は勉強と運動に日を費やしていた。彼女は…彼女の時間は熱っぽい夢に費やされているように私には思えた。今、彼らを思うとぞっとする。彼女は五分と気楽に寛ぐことが無かった。彼女は私に演奏や歌を望んだり、或は彼女と合唱してくれるように頼んだりしたが数分もすると立ち上がり、もう結構、好きじゃないわと叫ぶのだった。彼女はいくつかの外国の作品の翻訳を始めたが何行も訳す前に悲運の調子が続くのだった。「一緒に外に出ましょう、ミス・フォスター。この家には耐えられない、窒息してしまうわ」と彼女は言ったものだ。私達はでかけたが、ことによると公園の門に行き着く前に彼女はやるせないため息をついて言うのだった。「戻りましょうよ。この公園には我慢できないわ。」美しく不安な顔に、私は一瞬たりとも落ち着いた表情をみとめたことがなかった。夕刻はウラメールでの生活の中で恐らく最も侘しい時であろう。旦那様が私達と一緒に夕方を過ごすことはまず無かった。夕食が済むと彼は自室に赴き、その後彼を目にすることは無かった。

だが、ある夕べ…ああ、なんという夜だったのだろう！非常に激しい嵐が荒れ狂っていた。雪は全て押し流され、どしゃぶりの雨が降っていた。雨は窓を打ち壊そうとするかのように叩きつけていた。風の激しさは凄まじかった。互いの話し声も殆ど聞き取れなかった。木々は根元から引き裂かれドアや窓はがたがたと鳴っていた。二度、馬小屋の大きな鐘が不規則に鳴った。犬は吠え、使用人達は恐怖に青ざめていた。いつもの

ように旦那様は食堂から立ち去ろうとした。驚いたことに奥様が彼に近寄った。この度は彼女は彼に触れず、彼の腕に手を掛けることもなかったが、私が見たこともないような絶望的な瞳で彼を見上げた。「旦那様」熱望するあまりに震える声で彼女は言った。「どうか私達と一緒にいてください。恐ろしいのです。神は今夜お怒りで、私は本当に不安なのです。一緒にいてください。」一瞬、彼の目に炎が燃え上がった。そして、唇が震え、怯えた目をした白い顔を見つめるとその炎は消え、代わって深い哀れみが生まれた。彼女の懇願に私の懇願も加勢すると効果がありそうに思われたので、私は言った。「この風と雨では誰でも不安になりますわ。」彼は僅かな間ためらった。彼は妻ではなく私を見た。「貴女は本当に不安なのですか、ミス・フォスター?」と、彼は尋ねた。「いらして下されば嬉しいですわ。」私は彼女の目にある静かな懇願に心を動かされて言った。「ではここにおりましょう。」と彼が答えた。彼女の安らいだ表情は美しかった。彼の前に居ることを彼女がどうしてそれほど好むのか、私には理解できなかった。彼は話しかけもせず、彼女の方を見るわけでもなく、側に寄ることも無かった。それでも彼は彼女の話の全てに、ある種の好奇心をもって耳を傾けている気がした。その夕べ、旦那様と私の間には友情らしきものが生まれた。彼は育ちが良く、上品で洗練されていた。その態度には独特の魅力があり、単なる礼儀正しさという以上の、ある種の騎士道精神が感じられた。彼は優れたフランス語及びドイツ語の学者であることが分かった。私達はゲーテやハイネ、そして彼が熱狂的に崇拝する、非常に優美で独創的な作家フーケについても話をした。それはとても楽しい会話だった。その会話に奥様を引き入れようと私は何度かやってみたが、私が彼女に話しかけると彼は黙ってしまうのであった。彼女が何か批評しても彼は応じなかった。私は、彼女に恥をかかせるのが全く気の毒になったので彼女を引き入れることはやめてしまった。やはり奇妙な感じであった。片や知的で思慮深く雄弁で楽しい話し相手の夫、片や明けの明星のように美しい妻、であったが彼らの間には誰にも橋渡し出来ない裂け目があった。私は旦那様が好きだった。彼に欠点は見られなかったが、私はあることに気付いた。私達が何を語ろうとも議論のテーマに彼がどれほど夢中になっていようとも、悲哀の影が彼の顔や暗い瞳から消えることはなかった。疎まれた夫人に対する憐憫が私の胸を占めた。確かに彼女はひどく苦しまねばなるまい!彼は私にはとても親切で優しかったが、彼女に対してはひどく冷たく、黙しがちであった。とうとうその状態は私にとってひどく苦痛になり、旦那様が私達と夕べを共に過ごすよりはどんなことでもましだと独り言を言う始末だった。秘密とは何か?彼が私に話しかけている間でさえ、私はこの疑問について何度も自問を繰り返した。どちらにも欠点は見えず、さりとてあのように冷淡にするべきどんな原因や理由も見当たらなかった。遂に十時になった。嵐は弱まっていた。旦那様は立ち上がった。「もう恐くはないでしょう。」優しく微笑んで私を見ながら彼は言った。「風はおさまったし、雨はやんだ。」私は本能的に奥様を見た。彼の目は私の視線を追った。だが視線が彼女の上に落ちると、その表情はがらりと変わった。そして礼をして彼は出ていき、

彼女は死のような苦しみの表情を浮かべて顔を背けた。

第Ⅳ章

もし旦那様が奥様を嫌いなら何故別れなかったのか？もし彼女が過ちを犯したのだとすれば何故彼女を罰さなかったのか？もし彼にも覚えのあることについて彼女の陰口が叩かれているのなら何故咎めなかったのか？いかなる形の生活であれ、これよりはましに違いない。彼の側の厳格さや冷淡さに何の変化も緩和も見られず、彼女の側の情熱的な愛情や報われない崇拝も少しも損なわれることがないままに日々は過ぎていった。ずっとそのままだろうと私は思っていた。私は、私には理解できない秘密を観賞することに自分の生活の全時間を費やしていくべきなのかどうかを鬱々として折々考えていた。夫妻がお互いに話しかけることがあれば、彼らの話から真実の断片を集められたかも知れなかった。旦那様は思いつく全ての話題について何時間も私に話しかけ、私は時々彼の翻訳を手伝った。だが私達が一緒にいる間、妻の名が彼の口の端にのぼったことは一度たりとも無かった。私は、ただもう若かったので、若者にありがちな好奇心を抱いていた。私は、自分が生活していたその家の秘密を是非とも知りたがっていた、と言わねばならない。年があらたまり、クリスマスと同様にやり過ごされた。時々、ウラメールに居続けるべきか、世間に出てみるべきではないのか、この憂鬱な雰囲気から逃れるべきではないのか、私は自問した。だが奇妙なことに互いは疎遠であるのに、私は次第に気の毒な主人と哀れな奥方の双方にとても気に入られるようになった。自分が二人のうちどちらにより好意をもち、どちらをより気の毒に思っていたかは分からなかった。氷と雪の一月が終わり弱々しい陽光と共に二月が過ぎ去って三月が勇猛に訪れてきた。自然の美に慰めの力と魅力があることが私には幸いであった。その輝きと優しさがこの恐ろしい陰気を追い払うのにきっと何かの役に立つだろうと思いながら、私は懸命に春を見守っていた。

だが、心臓をひやりとさせるあの思い出の三月の宵が訪れてきた。嵐ではなく大降りの雨の日でもなかったが、風は聞いたこともないほど激しく吹き荒んでいた。私は風が好きだ。薔薇をこき混ぜ、ジャスミンの小枝を擡げる柔らかい息吹であれ、大きな枝を捩じり、頑丈な樫を曲げるような力強い突風であれ、私は風を好む。その夜は大砲の唸りのような一陣の風が丘から吹きぬけ、湖の上で消えたようだった。そしてその風はもう一度巻き起こり、泣き叫びながら吹きつけて長く尾を引いた啜り泣きのように館を取り巻いた。私は恐くはなかった。私はこれが好きなので、部屋に戻った時も分別のある娘らしく眠りに就く代わりにもっとよく聞こえるように窓を開け、そのただ中で心から楽しんでいた。突然、廊下に足音がした。誰かが静かに用心深く私のドアの把手に手を掛けていた。恐くはなかったが、把手の物音で心臓の鼓動が速まったことを白状せねばならない。私は行ってドアを開けた。驚いたことに、青い化粧着に身を包み、髪を肩に垂らして、死人のように真っ白な顔で目に溢れんばかりの恐怖を湛えた奥様が立っていた。その瞬間でさえ、蠟燭を持った彼女の手の白さに気付かざるを得なかっ

た。「お邪魔するわ、ミス・フォスター、でも私は恐い…ああ、本当に恐いの！一緒に来て下さる？」と彼女が言った。「はい、奥様。でも何が恐ろしいんですの？」と私は答えた。「風よ、風！」彼女は答えた。「きっと今夜は全ての死者の魂が外に出て、泣き騒いでいるのよ。一緒に来て下さる？」彼女は頭のてっぺんから足の先まで震えていた。その額には相当の苦悩が見て取れた。蠟燭を持った手は震えていた。何があの美しい顔を、見るに耐えないこんなに恐ろしいものに変えたのか？「怯えなさることはありませんわ、奥様」と私は言った。「三月はいつも風が荒れるのですし。それを怖がっていらっしゃるのでしょう？私には美しく思えますが。」「私の部屋に聞こえるのは風じゃないわ。」彼女は囁いた。「ああ、来てちょうだい！」それ以上何も言わず、私は彼女の手から蠟燭を受け取り、一緒に行った。奥様の寝室に着くと、全ての灯りが灯されていた。彼女は私の腕に手を乗せた。「貴女に聞いて欲しいのよ。」彼女は低くしゃがれた声で囁いた。「聞いて！」

たいした怯え方でもなければ見落としたかもしれないが、私の前に立った彼女は張りつめた絶望的な顔をし、目に恐怖を浮かべて手を擡げていた。ひどく気味の悪い情景であった。「聞いて！」と彼女は繰り返し、私は窓のもとで優しく哀しい風の啜り泣きが、かろうじて聞こえる程度の唸りに落ち着いていくのを聞いた。「あれは何？」彼女は総身震え上がりながら尋ねた。「もう一度聞いて、そしてお願いだから言って、あれは何なの？」風の断末魔の悲鳴は、殆ど聞き取れないほど優しくぼんやりとした、窓硝子の軽いノックに変わった。この怯えた女性が苦悩に叫んで遂に床に崩れ落ちてしまうまで、その音は何度も繰り返した。私が決して忘れられないその叫びは、まぎれもなく恐怖の絶叫であり、これを記す今でも、私の耳元に響いている。「私には分かっているわ！」彼女は叫んだ。「ここに入れないで！窓を閉めて！追い払って！ああ、追い払って！」そして彼女は気を失い、苦しみぬいた真っ白な顔で床に崩れ落ちた。私は彼女を持ち上げて椅子に寝かせ、窓に歩み寄った。月が芽吹いた木々を照らすばかりであった。一瞬、あの音は蔦の小枝が窓硝子に軽く打ち付けられた音かと思った。このことに気付くと、起こして安心させようと、私は彼女の許に戻った。説明し難い恐怖をいっぱいに湛えた青い瞳を開けて、彼女は私が寝かせたそのままの場所に横たわっていた。「追い払ってくれたのでしょう！」彼女は嗄れた囁き声で尋ねた。「追い払うものなど何もおりませんわ、奥様」と私は答えた。「何もいないですって？気は確かなの？全く何もいないですって？」「ええ、窓の外に何が居るはずがありましょう？」私は彼女の気が触れたかと思い始めた。彼女の振る舞いにはそれしか説明がつかなかった。風は暫くの間おさまっていた。そして再び吹き始め、同じように微かな啜り泣きが窓を取り巻き、その音はごく当たり前に聞こえたのだが、彼女にとっては明らかに超自然的恐怖に満ちているのだった。彼女は飛び上がってまた手を持ち上げた。「聞いて！」彼女は叫んだ。「何でもありませんわ、奥様。」私は断固として言いながら、恐らくは唯、重度のヒステリー発作のせいだろう位に考えていた。「何でもありませんわ、奥様。」私は繰り返した。「お分かりですか？あれはただの風の唸りで

すわ。」「いいえ、違うわ！」彼女は言った。「貴女にはそう聞こえるのね？本当は何か分かる？小さな子供の、あそこに立っているとても小さな子の泣き声なのよ。ああ！今、聞こえなかった？」確かに、子供の泣き声やひどく苦しんで呻く声に微かに似ているところがあった。彼女が言わなければ私は思いも寄らなかった。

「奥様」と私は言った。「理性に耳を傾けて、落ち着いてください。愚かでヒステリーじみて神経質で馬鹿げたことですわ！一緒に窓までおいでください。ご自分で見聞きして下さい。」彼女は手を振り絞った。「出来ないわ！」彼女は叫んだ。「なさらなければ」と私は言った。「それしか確信なさる術はありません。いらしてください。」私は彼女の白い手をとって無理やり部屋を横切らせた。私はブラインドとカーテンを横に寄せ、彼女が見るように窓を開けた。「何もいないでしょう。」私は言った。「月や河や木々を見てください。」激しく身震いして彼女は顔を背けた。「それじゃ、夢を見たに違いないわ」と彼女は言った。「何の夢を見たのですか？」私は尋ねた。「こんな夢だったわ。誰かが窓を叩いて、私はとても恐くて起き上がったの。そして子供の、微かな息で啜り泣く哀れな小さな声が聞こえたの。その声は窓から聞こえてきたわ。私は窓に近付いて、今貴女がしたようにカーテンを脇に寄せ、そして私は…ああ、神が私の目を永久に見えなくしてくれたなら！…小さな真っ白な経帷子を着てそこに立ち、弱々しい小さな手で窓硝子をとんとん、と叩いている幼い子供を見たの。ある瞬間その赤ん坊の目が私の目を見てぎらっと光り、その男の子が入ってきたら私は倒れて死ぬと分かったわ。」「それは夢ですわ。」私は言い様の無い安堵のため息をついて言った。だが彼女は恐ろしい叫びを上げて私から飛びのいた。彼女は膝に崩れ落ち、美しい髪をかきむしり、荒々しく両手を打ちつけ、私は残されたその夜中、彼女を慰める羽目になった。まさに三月の冷たい風を思い起こさせるきっかけとなったのだった。

第Ⅴ章

四月が、柔らかな春雨や菫の芳香、育った新芽、綺麗ならっぱ水仙そして淡い色の桜草と共に急いで通り過ぎたが、ウラメールは依然として変わりが無かった。ここを訪れてからほぼ四ヶ月が経ったが、ルドルフ卿の屋敷では憂鬱も圧迫感も悲惨さも全て変わりが無かった。だがこの時までに私はここを離れる気を全く失っていた。私の愛情、興味、想いは皆、この準男爵とその妻に向けられていた。生活様式を除けば、旦那様にはそれほど不可解なところは無かった。全ての秘密は奥様にあるように思われた。あの夜以後、三月の風がひどく吹き荒れる時、彼女の心の箍が外れて均衡を失うのではないかという疑いを私は引きずっていた。だが、仮にそうであっても旦那様の振る舞いの秘密を解き明かすには至らなかった。妻を愛する男性ならこうしたどんな悲運をも遠ざけるべく妻にずっと注意を払ったはずであった。

別の一件も覚えている。それは静かな灰色の早朝の光の中で起きた。再び廊下に足音が響き、また私の部屋のドアの把手が回された。この度は奥様だと分かっていた。彼女は同じ恐怖の

表情で外に立っていた。「一緒に来て欲しいの、ミス・フォスター」と彼女は言った。そして当然の成り行きとして私は赴いた。彼女は注意深く彼女の部屋のドアを閉め、蠟燭をテーブルの上に置いて振り向いた。見るに恐ろしい程、白い顔には苦痛が浮かんでいた。「今よ」と彼女は叫んだ。「今、何が聞こえるか言って！」彼女は息をするのも辛そうに見えた。大きなあえぎが唇から洩れた。「早く」彼女は言った。「早く言って！何が聞こえて？」「何も」と私は答えた。「何の音もしませんが。風さえも静かですわ。」彼女は激しく叫んで両手を打ち鳴らした。「聞こえるはずよ。私を落ち着かせようと思って『聞こえない』って言うんだわ。貴女にも聞こえるなら恐くはないわ。でももし私だけに聞こえるのだとしたら、ああ私はどうしたらいいのかしら？」彼女は両手に顔を埋め、私が恐ろしくなったほど激しく震えた。「奥様、何が聞こえるのか教えてください」と私は頼んだ。「子供の泣き声よ。貴女には聞こえないの？私がおかしくなってしまうまで一晩中私の枕の側で泣き叫んでいたわ。」彼女は言った。「私は狂っているわ！ああミス・フォスター、その子を探して！きっとここに居るわ。ひねくれた使用人達の誰かが、その子を泣かせて私を怖がらせようと思ってここに隠したのだわ。見つけなくては。もうこれ以上は耐えられない！」この美しい女性が存在していないはずのものを死に物狂いでしらみつぶしに探し回るこの光景ほど痛ましい情景は見たことが無い。唐突に彼女はドアを見た。「ああ」と、彼女は叫んだ。「今は外に出たわ！廊下の端で消えてしまった。行ってしまったわ、ああ良かった、行ってしまった！」彼女は彼女は震えながらドアからはなれ、椅子に身を沈めた。彼女は疲れきり、青ざめて震えていた。私は彼女の許に行き、手をとった。その手は死者の手のように冷えきっていた。「また夢を御覧になったのですね、奥様」と私は言った。「以前も同じ夢でどれほど恐い思いをなさったか覚えておかれるべきですわ。元気をお出しください。ご病気か神経質になられているかに違いありません。丈夫で健康な人ならばそんな幻想や夢に悩まされることはありません。ここをお離れになるべきです。私が旦那様にそれをお話してみます。奥様の具合がどんなにお悪いか旦那様は御存じ無いのですわ。」彼女は激しい叫び声をあげて泣きながら私に飛びついた。「そんなことをしては駄目よ。私はよそへは行けないの。一言も彼に喋らないと約束して。もしそんなことをしたら私は自殺するわ。」私は彼女の激情に驚かされた。「お望みでないなら勿論話しません。でも奥様は本当にご病気です。医師の診察を受けられるべきです。奥様の恐ろしい幻想は偏にご病気のせいですわ」と私は言った。彼女は私に抱きついて肩に美しい頭をもたせかけた。「そう思う？」彼女は囁いた。「ああ、どうか慰めてちょうだい。私の心は引き裂かれて孤独なのだから。」彼女の問題さえ知らないのに、どうして慰めようがあろうか？苦い啜り泣きが唇から洩れている間にも、どれほど彼女の動悸が高まり、どれほど震えていたかが分かり、この美しく哀しい女性の人生にどんな不都合があったのか、私はそれまで以上に不思議に思った。私は彼女の輝く美しい髪を撫で、私の手が触れることで彼女は落ち着いた。「妙なことですわ。」と私は彼女に話しかけた。「奥様がいつも同じ夢を御覧になって、

言ってみれば小さな子供の泣き声にいつも悩まされなさるなんて。」彼女の顔はこれ以上白くはなれなかったが、彼女は私の肩にさらに重く額を埋めた。「とても変ね！」彼女は呟いた。「ああ、おかしなことだわ！」「小さなお子様をおもちになったことはございませんのでしょう？」「ええ、全く。」「幼いご兄弟はいらっしゃいました？」と私は尋ねた。「いいえ」と彼女は答えた。「幼児になんの関わりもお持ちでない奥さまが子供の泣き声に悩まされねばならないなんてとても変わった出来事ですわ！」彼女は大きく目を見開いて私を見た。「ミス・フォスター、私のこの幻想のことは誰にも話さないでくれるでしょう？」彼女はゆっくりと言った。「私が狂ったと人に思われるのはとても嫌なの。」そして私が彼女の側に居るならば、落ち着いて横になり、眠るようにすると約束した。私はその通りに、彼女が熱に浮かされた不安な眠りにおちるまで、彼女の手を握って傍らに座っていた。ああ、どんなに不安だったことか！彼女は美しい頭と悩み抜いた顔を絶えず左右に振っていた。唇が固く結ばれることはなく、彼女は「全て貴方のためにしたことよ、愛しい貴方ー全て貴方のために！」と繰り返し叫ぶ叫ぶのであった。そして祈り、懇願、ため息に涙が続いた。だが、ひときわ大きく響いたのは「全ては貴方のためよ…貴方のために！」という哀れな叫びであった。朝日が一面に差し込む中、私はぐっすり眠った彼女の傍らを離れた。

この家の陰気が私にまで拡がるなどということがあり得たのだろうか？日がな一日、私は陰鬱だった。奥様は確かに深刻な病状の、或は精神異常のおそれのある病にひどく冒されていた。誰に話をしたらいいかさえ分からないにも関わらず、彼女がはまり込んでいるところから抜けられるように手を貸すことが自分の義務だと考えた私はひどく困惑していた。私は彼女を裏切りはしなかった。彼女の奇妙な幻想と恐ろしい夜については秘密を守り通していた。だがどうすれば彼女が最良の方法を採れるのか、私には誰かの助言が必要だった。考えられたのはたった一人、家政婦のハーパー夫人であった。ある午後、私は彼女を探しに行った。話し易いように一緒に表に出てくれるように私は彼女に頼んだ。私は、奥様はひどい病気だと思うということ、私に出来る以上にお世話が必要なこと、を話した。この家政婦には、気の毒に思っている様子が見えたが、ひどく当惑しているようだった。「私は貴女と同じくらい困っているのです、お嬢さん」と彼女は言った。「ここはよその家とは全く違います。ご夫妻お二人の間に何があるのかは、私にも分かりませんが、何か恐ろしいことだろうと、恐れています。お二人の様子はまるで看守と囚人のように私には見えるのです。」「どちらが看守ですか？」私は尋ねた。「旦那様です。」彼女は答えた。「結局のところ、旦那様と奥様のお二人をこれほど好きでなかったら、私はここにとどまってはいないでしょう。お一人ずつ別のときは理想的に見えますが、ご一緒の時のご様子にはどんな人でも頭を悩ますでしょう。」「ハーパーさん、ずっとこんな調子でしたの？」「そうです。[2]私と執事を除いて、ここの使用人達は新しい人ばかりです。私達は旦那様がブルックホールにお住まいの頃から住み込んでいました。ご結婚の時もお仕えしておりました。」「ご結婚には変わったところがありました？」

と、私は尋ねた。「何も。花婿が花嫁を熱愛していることは誰もが知っていましたし、私もあれほどの熱愛を見たことはありません。ご一緒のお姿はとても素晴らしいものでした。旦那様は花嫁をブルックホールに連れてお帰りになりました。そうして私がそこでお仕えしたのはほんの一年だけです。その後、随分急にお二人はここに移られ、以来ずっとこの奇妙な生活様式で住んでおられます。」「それでどうしてお二人がここに来られたか…お互いにあんな境界線を画するようになられた原因については何ひとつ御存じないのですか?」「何も。ブルックホールでは全てが明るく幸福でした。館はいつもお客様で溢れていました。旦那様が突然私をお呼びになった時、舞踏会の予定まで組まれていたことを覚えています。『ハーパーさん、我々はウラメールに行くことになった。』と旦那様は仰ったのです。『一緒に来てくれますか?ブルックホールに戻ることはもう無いでしょう。』『とても急なお話でございますね、旦那様。』と私はお答えしました。そして旦那様のお顔からどんなに血の気が失せていたかに気付きました。それ以来、旦那様は全くお人が変わられて二度と以前の旦那様には戻られませんでした。クリスマス・イヴのことでした。私達はクリスマスの翌日には、ブルックホールを発ちました。ここに来て丁度一年になります。」「でもきっと何かわけがあるはずです」と私は言った。「共に若く、互いを熱愛している夫婦が訳もなくこんな有様になってしまうはずはありません。」「私は何も分かりません。何百回も考えてはみたのですが。」「ブルックホールでは何もありませんでした?奥様が旦那様を嫉妬させなさったとか?」ハーパー夫人は笑って答えた。「その心配はまずありません。うちの奥様ぐらい夫を崇拝している女性もいないでしょう。奥様は旦那様がいなければ生きていかれないようでした。誰もが驚くほどでした。他の男性と談笑されていた時も、奥様が本当に彼らに心を留めていらしたとは思えません。彼女の目はいつも旦那様を追い、その心はいつも彼に向けられていました。」「でも何か起こりそうな前触れはありませんでしたか?」「何も」と言うのがその返事だった。「ブルックホールであった唯一の出来事は、乳母のマーサ・ジェニングスの死でした。彼女はクリスマス・イヴの朝亡くなりましたが、それは旦那様と奥様があんな突然に家を離れられたことには何の関わりもありません。奥様については旦那様にご相談なさるのがよろしいかと思います、ミス・フォスター。一度はあれほど愛していらっしゃったのですから、奥様に関わることがあるとお考えならご心配下さるでしょう。」

私はハーパー夫人の助言に従い、すぐに旦那様の許に向かった。彼は銃器室に居た。「少しお時間をいただけないでしょうか、旦那様」と私は声をかけた。彼は魅力たっぷりの飾らない態度で礼儀正しく頭を下げた。「どうぞお入りください」と彼は応じた。「私はとても臆病なのです、旦那様。銃が恐いのです。」「それでは私が行きましょう」と彼は笑いながら言い、私が立っていた芝生に降りて「御用は何でしょうか、ミス・フォスター」と付け加えた。だがその愛想の良さも、私が奥様について話したいと言い出すまでであった。奥様がひどく病んでいて心配であることを私は彼に告げた。彼は即座に、冷酷で厳格で頑固な人間に変わった。彼は私が話し終わるまで耳を傾け、ただ、奥

様が病気だと思うなら好きな医者を連れてきて診させてもよい、と言っただけだった。そして彼の興味は尽きた。「旦那様」私は呼びかけた。「旦那様は…いえ、奥様のことをよく知っている誰かが、奥様は狂っているという疑いを持っていることはありませんか?」「狂っているか、だと。」彼は限りない嘲りを込めて繰り返した。「狂気!そうだったらどんなに良かったか!」そして、この言葉が何を意味するのか考えようと私はそこを離れた。

第Ⅵ章

五月末が近づいていた。この間ずっと、唯一人の客も玄関ホールに見かけることは無かった。それはクリスマスの雪が舞っていた頃と同様、天国のような戸外をよそに、薔薇や百合がほころび始めた今でも変わらなかった。思うに、岩山や丘原、山や谷に囲まれた湖の地方は、イングランドでも最も美しい。丘の陽光や深く蒼い湖、曲線を描いた小川、笑う緑の谷を、私は決して忘れることはない。五月の英国を見ることが長い間の夢だったが、やっと叶えられた。何もかも、この半分も美しいとは思っていなかった。そしてこの五月はまさに詩人のためにあるような月であり、美しく晴れやかであった。垣ではピンクや白のさんざしが育ち、ライラックやきばなふじは満開であった。金銀に敷き詰めたような雛菊や金鳳花で野原は輝き、胡桃の綺麗な穂状花序は豊かであった。奥様は医者に会うことを頑なに拒んだ。私が話をした時、「何故私が生き長らえなければならないの?」と彼女は言った。「嘗て大きな望みを抱いていたわ。でもそれはゆっくりと確実に消えつつあるの。それが消え絶えた時、私も死ぬわ。どんな生きる望みが人生にあると言うの?」彼女は激しく叫んだ。「クリスマスの雪、三月の風、夏の花が訪れては過ぎ去ったわ。私は自分の心を蝕んで来たのだわ。」「でも奥様」と私は言った。「どうしてそんな風に思われ、お考えにならねばなりませんの?どうして他の人と同様、奥様の人生が輝いていてはいけませんの?奥様はあまりにも御不幸ですから他人には申せませんが奥様には敢えて申し上げましょう。どうして絶望する必要がありますの?奥様は若く美しく、裕福でいらっしゃいます。そして奥様には旦那様が…とにかくそれについては申し上げないほうがいいでしょう。」「貴女にはわからないのよ」と彼女は言った。「嘗て私は恐ろしい過ちを犯したの。とてもひどい罪を。今はそれが分かる。彼は決して赦さず、忘れもしないでしょう。」「どうしてそのようなことを?」私は尋ねた。「彼を愛していたから。」彼女は答えた。「私が真実を語っているのは神が御存じよ。正しいか間違っているかなんて考えもしなかった。ただ全て彼のためにと考えたわ。」「何をなさったのかお話下さいませんか?」私は問うた。彼女は絶望を極めた表情で震えながら私から身を引いた。遂に謎が解けるのかと思われた。だが、彼女は叫んだ。「いいえ、何千回尋ねようとも!その話は私の唇を焦がすわ。今は分かるけど、その時は分からなかったの。」「それでその奥様の過ちのせいで旦那様とよそよそしくなられたと仰いましたね?」と私は尋ねた。「ええ。彼は決して私を赦さないと言ったし、私もそうなるだろうと思い始めたわ。一度は希望を持ったけど今は何もないわ。だ

から静かに快く死んでいけるように祈っているの。生きることは私にはつらすぎるわ。」押して尋ねることは出来なかった。まさに彼女の命を蝕んでいるこの秘密について語るように無理強いは出来なかった。

春も次第に暖かくなり、彼女が苦しむ夜も殆ど無くなった。戸外に出るように彼女を促し、山谷や花木の美しさがその興味を唆るように話してみたが徒労に終わった。ある朝、彼女をエシュウェイト湖に連れ出し一緒に草の帯の上に座っていた時に彼女は私に言った。「私の心は死んでいるわ。日の光りや花々の美しさが貴女には感じられるでしょうが私には駄目なの。私には全て同じに…つまらない希望の無い空虚なものに見える。」「元気を出すべきだとは思われませんか?」私は尋ねた。「拭い切れない悲しみというものがあるのは分かりますが、奥様の悲しみがそんなものであろうはずはありません。」微かな希望の輝きを目に宿らせて彼女は私を見た。「どんなものを拭い難い悲しみと呼ぶの、ケイト?」ー私達はずっと近しくなり、彼女は私を大層気に入って、普段は洗礼名で私を呼ぶ程になっていた。「拭い難い悲しみというのは、取り返しがつかないような悲しみだと思いますわ」と私は答えた。「ではどんなことがそのような悲しみを引き起こすのだと思う?」彼女は尋ねた。数分の間じっくりと考えて私は答えた。「拭い難い悲しみに発する理由なんて殆どありません。死はそれとは異なります、何故なら天国で再会できる望みがあるからです。不治の病も違います、何故なら忍耐強く生まれた者達にとってそれは天恵をもたらすものだからです。財を失うことではありません、何故なら富以外にも人生には幸福なことが沢山あるからです。そして激しい労働などは誰も傷付けたりはしないものです。どんなものが拭い難い悲しみをもたらすのか、殆ど思いつきません。唯一つ思い当たるのは救いようの無い悪事を犯すことですわ。」「元に戻せないものの悲しみというのが最も深いと貴女は考えるのね?」輝く水が緑の土手際に接し、野の花や羊歯に取り巻かれた地面と空の美しさを眺めながら、私は再び途方に暮れた。これらは全て神のなせる業であった。百合を美しく装わせ、雀に糧を与えられる神が自らの創造物のうちの一つに拭い去れない苦しみを与えたもうことがあろうか?「拭い難い悲しみなど存在するはずが無いと思い始めましたわ。」私はゆっくりと言った。「悪事、過ち、犯罪が最も大きな悲しみのもとであるのは衆目の一致する所ですが、神が許したまわないほど大きな過ちや犯罪は無いのです。」「そう思う、ケイト?」悲しみに沈んだ彼女の目には私が見たこともなかった一筋の希望の光が初めて生まれ、私の目をのぞき込んだ。「確かですわ。赦しを乞うても神がお赦しにならないほど大きな罪も恐ろしい犯罪も存在しません。」と私は答えた。「でも人は」と彼女は言った。「何故、人は許さないのでしょう?」「人は人間の能力に於いて行動し、神は神のお力を以て動かれます。この世で、人は人間の法に従って判断し、報い、罰を与えるのです。」「それでは、時には人間が罰しても神が赦したもうことがあるかしら?」彼女は悲しげに言った。「あり得るでしょう。泥棒を例にとって下さい。泥棒は罪を悔い、涙を流して祈り、赦しを乞うこともあるでしょう。それでもやはり人は彼を罰せねばならず、彼は牢に入らねばな

らず、能うるならば、不法に入手した品を戻させられるでしょう。他の犯罪についても同じことです。人がどう処置しようと神は、慎ましく罪を悔いた心をいつもお赦しになるということだけは、私は確信しています。」「でも」と彼女は絶望的に言った。「旦那様は決して私を赦しはしないでしょう。もし私が跪き、朝から晩まで彼に祈ったとしても彼は同じ冷淡な仕種で手を振って私を追い払うでしょう。ああケイト、ショックを受けないでね、でも私が思うに…いえ、間違いなく私は神の赦しよりも、むしろ夫の赦しが欲しいのよ。」そして私の目をのぞき込んだ彼女の願望を秘めた目に、私の心は痛んだ。「いいえ、そんなつもりであってはなりません、奥様。その場合には、神に捧げるよりも大きな愛を貴女のご主人に捧げてしまわれたに違いないのですから。」「そうだったわ。」彼女は喘いだ。「それが故の私の罪、私の恐ろしい罪だったのだから。私は利口になるわ、ケイト。私は神の赦しを求めて、嫌と言うほど祈るわ。そしてそれが叶えられた時、夫の赦しを求めることにするわ。ああ、私の罪、この罪！全ては彼への愛のためだった。彼のためなら火水の中にだって飛び込んだのに。そして今は…」私は不思議に思い、驚いて彼女を見た。彼女は何をしたのか？彼女の話す罪とはどんなことか？彼女の顔には深い悲しみの跡はあったが、罪の痕跡は見当たらなかった。彼女の心が和らいでいたその時、二三の質問をすればその秘密を探り出せたかも知れなかった。だが私はそうはしなかった。しばらく話をした後、木々の間を戯れ、湖面に輝く金色の光を眺めながら彼女は黙って座っていた。そして彼女は再び口を開いた。「ケイト」と彼女は呼びかけた。「もし貴女が誰かをとても愛していたとして、その愛の深さ故に世界の全てを忘れ善悪の判断も見失い、そして愛する男性のために大きな罪を犯してしまった時、彼が簡単に赦しを与えるだろうと考えてはならないのかしら？」「その赦しについては偏に罪がどんなものであったかによると考えるべきでしょう、奥様。」この言葉は彼女に一撃を与えたようだった。彼女は静かに痛々しく涙を流した。「奥様がどんな間違いを犯されたとしても、もう充分に苦しまれましたわ」と私は優しく言った。「私は死ぬまで苦しむでしょう！」と彼女は呻いた。数分後、私は珍しい種類の羊歯を探しに彼女の側を離れ、戻ってみると彼女は草に顔を埋めて横たわり、啜り泣いていた。「赦して…ああ、赦して！全ては彼のためだったのよ。私はそれほど彼を愛していたの。」そうして、この女性の生涯の秘密が何か、私はそれまで以上に不思議に思うようになった。

第Ⅶ章

「ミス・フォスター、ハーパー夫人に伝言をお願いできますか？バーンハムウッズで十一時の約束があるのですが、今は九時なので自分で彼女に会う時間が無いのです」と、ある朝旦那様が言った。「喜んでお伝えしますわ、旦那様。」彼が相変わらず面前にいる妻を無視したことを悲しく思いながら私は返事をした。彼女は深い痛みの影を浮かべた目で見上げていた。「私の弟のミスター・ウリック・カルモア(3)を今夜迎えるつもりですが、彼は二三週間滞在する予定なので、彼のために青の間を準備していただきたい、とハーパー夫人に伝えてください。」青の

間とはとても綺麗な二つの部屋で、西翼の旦那様の部屋の近くにあり、一部屋は居間で、もう一部屋は寝室になっていた。「勉強机が居間にあったか確認するようにハーパー夫人に頼んでください」と旦那様は続けた。「ここにいる間、弟は勉強をしたがるでしょうから」そして彼は礼をして出ていった。奥様が私のところに来たが、その両手は異様に白く、顔が蒼白になっていることに、私は再び気が付いた。私の腕をとると言うよりはひっつかみ、「ケイト」と彼女は低く戦いた声で囁いた。「ケイト、これはどういうことかしら?」「仰る意味がわかりませんが、奥様」と私は言った。「よりによって何故、彼が来るのかしら?ウリック・カルモアがー何故、彼が来るの?私はー私は恐いわ。」「何が恐いんです?」私は尋ねた。「旦那様の御兄弟というのは確かではありませんの?」「いいえ、そうよ。」彼女は言った。「彼は何のために来るのかしら?」「旦那様にお会いになって、多分ゆっくりなさるのでしょう。」と私は言った。「そう思う?」彼女は熱意を込めて叫んだ。「他に何かあると思わない?」「他に何がございましょう?」と私は尋ねた。「彼は法廷弁護士でとても頭が切れるの。」と彼女は言った。「そのことは何の関係もございませんわ。」と私は笑いながら答えた。だが彼女は震え続け、私は旦那様の用を足すために側を離れた。

「ミスター・ウリック・カルモアがおいでですって!嬉しいこと!」と家政婦は言った。「彼を御存じですか?」と私は尋ねた。「ええ。私がブルックホールに居た頃、向こうに訪ねていらして、私はあの方が大好きでしたわ。おいでだなんて嬉しいですわ。きっとこの惨めな家を何らかの形で変えて下さるでしょう。」「ではウラメールにいらしたことは無いんですの?」私は尋ねた。「ええ。最後にブルックにお見えになったのはお葬式の時でした」と彼女は答えた。葬式というものも大して珍しくは無いので、誰のことか聞く気にはならなかった。「あの方がブルックホールにいらしていた頃、旦那様と奥様の間は全く普通でした」とハーパー夫人は続けた。「お二人があの方を駅まで運転して送って差し上げたことを覚えています。ここがどんなことになっているか御覧になれば本当に驚かれるでしょう。でもきっとお二人の状態を好転させてくださると思います。あの方は旦那様と奥様お二人ともに、とても愛されておいでですもの。」私は奥様の蒼白になった顔と怯えた目を思い出し、それは彼女にもいえる話かどうか危ぶんだ。

五月二十七日の夕方、私は私有地の中をちょっとした散歩に出ていた。ウリック・カルモアの到着を待って、夕食は八時半まで延ばされていた。私は湖の側を彷徨い、きばなふじの金色や湖の蒼さ、さわさわと音をたてる緑の葉、遠くの茶色い丘などに心を奪われ我を忘れるまでその場に立っていた。湖から吹いたそよ風の冷たさで私は我に返った。準男爵家の秘密を解き明かそうと没頭しているうちに、時間は随分早く経ってしまっていた。私は急いで館に戻った。沢山の白いジャスミンとつるバラが覆い隠す玄関の外に私が立っていた時、見知らぬ人の声がした。「ウラメールに誰か客を迎えたの、ルドルフ?」「いや、誰も」と、素早く返事が聞こえた。「下の湖の側にいたのは、今まで見た中で最も綺麗な娘の一人だったよ」と、未知の声が続けた。「橋を渡っているときに彼女を見たんだ…黒髪で、完全な

絵になっていた。」「ミス・フォスターだ。」ルドルフ卿は静かに言った。「で、ミス・フォスターって?」未知の声が尋ねた。「君が言う通りとても美しい少女だが、それと同じくとても優しい娘だ。妻の話相手としてこのウラメールに住んでいる。」すると軽い笑い声が聞こえた。「そんなことをよく貴方が許したものだ。彼女のお相手はいつも兄さんだけで充分だったじゃないか。」この会話は私を指すのでは無く、この未知の男性は間違って私を綺麗な少女と言ったに違いなかった。何故なら、学生時代、他の少女達はいつも私の黒っぽい髪と暗い色の瞳をからかっていたからだ。勿論、この人がウリック・カルモアに相違無かった。彼はとても豊かで音楽のような声をしていたので、私は彼の顔が見たくなった。私は若くて誰からも誉められたり賞賛されたりしたことが無かった。綺麗だと誉められて私の心は喜びでわくわくした。そして夕食の鐘が鳴った。私は内気になり、恥ずかしくなった。だが自分のことを考える暇も無く、奥様が私の部屋を訪れてきた。「ケイト、私と一緒に階下に降りて頂戴」と彼女は言った。彼女はたっぷりとした瑠璃色のベルベットのドレスとお揃いの美しい真珠を身につけていた。「綺麗に見えて?」と彼女は熱心に尋ねた。「申し分なくお美しいですわ。女王様にお似合いのようなお召物です。」「でも私の顔はどうかしら?ケイト、もし今が初対面だとして、何かが心に引っ掛かっているように、命を蝕む秘密ありげに思える?本当のことを言って、ケイト、私は秘密をもつ女に見える?」はっきりと見るために私は彼女の周囲をまわった。優雅な襞に埋もれた素晴らしいドレスは申し分なく彼女に似合い、真珠は白い優雅な喉の周りと美しい巻き毛の中で輝いていた。これ以上美しい姿や顔だちはありえなかった。ああ、だが悲しいかな、彼女の言うことは正しかった…それは、秘密をもつ女の顔であった!隠してはいたが、瞳や唇はそれを裏切って緊張していた。恰も自分の人生の全てが私の答えにかかっているかのように彼女は私を心配そうに見守りながら立ち尽くしていた。暫くの間、私は黙っていた。「では、ミスター・ウリック・カルモアに知られたくは無いのですね?」としか私には言い様が無かった。「ええ」と、彼女は答えた。「それではお顔から緊張を解かれなくては。緊張と切迫感は全てを語ってしまいますわ。」「どうやって緊張を解けって言うの?」彼女は唐突に私にかじりついて叫んだ。「貴女はいつも親切で優しいわ。教えて頂戴、どうやって追い払えばいいの?」「忘れることです」と私は言った。言った途端、私は後悔した。彼女は腕を振り上げて、激しく叫んだ。「忘れろですって!ああ、私に一時間の間…たったの一時間の間だけ忘れてしまえる力があったなら!」激しい激情の発作の一つにさしかかっていたようでそれが治まるまで彼女は夕食のために降りていくことは出来なかった。私は彼女に話しかけ、理を説き、彼女のドレスを讃め称えたが、この手の賞賛はこの哀れな女性をいつも喜ばせた。そして夕食の鐘が鳴る頃には、綺麗な娘だと言われたことの喜びの一筋の光を私は殆ど忘れてしまっていた。

私は彼女と共にその部屋に入った。彼女は扇を手に持っていられないほどに震えていた。部屋に入ると、誰かが私達に会いに来た。端正な顔だちで愛敬のある声のその人は奥様の手を

とって言った。「ああ、ネスト、お元気そうには見えませんね。どうなさったのです?ミス・フォスターにご紹介戴けませんか?」ああ、その瞬間の喜びを思うと、死ぬまで私の心は興奮でわくわくするだろう。彼の最初の眼差しを私は死ぬまで忘れないだろう。そして私は宿命に出会った…運命の恋人に。それはウリック・カルモアが初めて私の顔を眺めた時のことだった。一瞬の視線だったと記憶しているが、胸は高鳴り、目の前に霧がかかり、漠然とした何かが心をかき乱した。その美しい瞳にちらりと見られただけで、突然私の全てはばら色に新しい人生に染め変えられてしまった。私が我に返った時、彼は奥様に話しかけていたが、その声は明らかに心配そうであった。「何がそれほど完全に貴女を変えてしまったのか、思いあたりませんね、ネスト。」と彼は話していた。「世界中で最も甘美な二つの笑窪があったのにどちらも消えてしまったではありませんか。結婚する時には丁度あんな笑窪がある妻を選ぼうと心に思ったことを覚えています。」なんと無様なことであったか!彼が丁度そう言った時、自分がそんな魅力に恵まれていたかと私は危ぶんでいた。私は急に目を上げ、彼が私を見ていたことに気付いた。ある重大な罪を見つけられたような気がして、私は髪の付け根まで真っ赤になった。旦那様が部屋に入ってきて弟の側に行って話しかけた。真っ青になって動揺しているような奥様を私は振り向いた。「奥様、失礼ですが、ミスター・カルモアがお呼びになった奥様の美しいお名前は何とおっしゃいますの?」と私は言った。哀しく美しい微笑がその綺麗な顔に浮かんだ。「ネストよ。ウェールズの名前なの。どうしてそう名付けられたかは分からないけれど。この名には随分色々な思い出があるわ。一年…丸一年その名で呼ばれることは無かったわ。私は殆ど忘れかけていた」と彼女は答えた。その時、あまり馴染みの無い音に驚いて私が視線を上げると、最高に気分が高揚している様子で本当に旦那様が笑っているのだった。彼の表情がその笑いでどれほどすっかり変わってしまったかとても言い表すことは出来ない。私はウラメールに、クリスマス・イヴから五月の終わりの今までいるが、こんなことは初めてだった。「ケイト、旦那様の私に接する態度にウリックが気付くと思う?」と奥様が言った。そうなるに違いないと思ったが、気付かれないために話し合いを重ねたことに触れて、私は出来るかぎり彼女を慰めた。

第Ⅷ章

その夜の夕食は、少なくとも私達二人にとって不安なひとときであった。奥様は明らかに旦那様との独特な関係をミスター・カルモアに見せまいと望んでいた。旦那様自身はいつもの態度を微塵も崩さなかった。必要な卓上の礼儀を除いて、妻に話しかけることは無かった。彼女は幾度か彼に話しかけ、ひどい状態になっていることを私達二人は何とか客の目から隠そうとしていた。だが恰も何事が起きたのか理解できず、見当もつかないといった風な、妙に訝しげな客人の眼差しが御一方からもう御一方へ二度移動したのを私は見た。彼は当惑し、戸惑っていた。それ故、彼の端正な顔を眺め、その唇からこぼれる明るく快活な一つ一つの言葉を聞く事の出来る、同じテーブ

ルにつくことは私にとって喜びではあったが、私は喜んでそこを離れた。その状況で会話を繋ぐことはそれ程大変なことであった。ミスター・カルモアは私達が通り抜ける間、ドアを支えてくれていた。彼は奥様に向かって微笑み、「遅くならないようにしますよ」と言った。「ワインで、ねばるのは我々男性の悪習なのです。」奥様の心は休まらなかった。

客間に戻ると、彼女は「私のために演奏して唄って、ケイト」と言った。「彼らの足をこちらに向けるようなことを何かして頂戴。彼らだけであそこに居残っているのが心配なの。」彼女は両手を握り締め、悩み抜いた悲しみに溢れた目をして部屋を行きつ戻りつした。「彼らを惹きつけるような何かを唄って頂戴。」彼女は懇願した。私は十八番の、フランスとイギリスの歌を歌った。彼らは来なかった。彼らが来ないだろうことは私には分かっていた。彼女の動揺は殆どヒステリックになるまで、刻一刻と高まった。「彼はどう思うでしょう、ケイト？ミスター・カルモアは何を考えるでしょうね？彼はこの変貌を見た…気付いたに違いないわ。原因を知るまで彼は落ち着かないでしょう。」「もし旦那様が私達と共に夕べを過ごしにみえないとしても、その間に奥様についてのお話もきっとなさらないでしょう。」私は彼女の恐怖を見てとった。その一生の秘密が何であれ、夫が弟にその秘密をばらしはしないかと恐れているのだった。旦那様にはそんなことは出来ないことが私には分かっていた。私は演奏し、歌い続けたが、彼らがやって来たのは十一時過ぎで、ウリックのハンサムな顔には憂鬱さと影とが拡がり、染み付いていた。それでも旦那様が奥様を裏切っていないことを私は確信していた。ミスター・カルモアは御一人からもう御一人へと訝しげな視線を漂わせていた。「私を責めないでください、ネスト。内輪の恥を外に漏らすのは正当ではないのですが、ルドルフは承知せず、法廷での私の全ての事件について触れるのです。それは不粋なことだと彼に言ってやりました。」そうして彼は私の側に来て話しかけたが、彼の声は私の耳に甘く快く響いた。だが私はそれ程心を奪われてはおらず、奥様が旦那様のところに行って話しかけるのを見ていた。祈りでもしているかのように彼女は腕を曲げていたが彼に触れようとはしなかった。私は後で知ったのだが、彼女はどんな心でもとろかすような声音でウリックがここにいる間は少しだけ慈悲をもって自分に接してくれるように懇願していたのだった。「契約は契約だ。破られることは無い。」というのが彼の答えだった。

殿方は半時間ほど客間にのこったが、ウリック・カルモアの目の当惑と戸惑いは深まっていった。巧妙で誠意のこもった彼のやり方で二人を近づけようと彼は骨を折っていた。ホイスト・ゲームが好きかと彼は私達に尋ねた。旦那様は「いや。」と答えた。会話において、彼は御一方からもう御一方へと繋げようとした。だが旦那様は頑固で冷淡で無感動で一何もその心を掻き立てたり、感動させたりすることは無かった。そして、まさにこれが実情だと認識してもそのやり方を続けていくには彼はあまりにも紳士であった。彼は二人のやり方にまかせ、傍観していた。彼らの間の障壁を露呈する何かが起きたとき、彼の目が物問いたげに私に向けられるのが分かったが私達は何の言

葉も交わさなかった。旦那様は弟君を大層愛していらっしゃるようだった。惜しみ無く注がれていた妻への愛情が彼に与えられたのに違いなかった。御一緒の様子には惚れ惚れするものがあった。旦那様は親切で優しく、ウリックは快活で優しかった。だが奥様はひどく痛ましげだった。そんなにも彼女が幸せ薄く見えたことは無かった。旦那様の奥様への態度にウリックは何の変化ももたらさなかった。彼は、親切で優しく愛情深く奥様に接していた。彼女の秘密については何も知らず、それについて考えることも知ることも無かったが、彼女への昔からの、情のこもった敬愛は変わることが無かった。

翌朝、ミスター・カルモアは一緒に朝食をとろうと降りてきて兄がいないことに驚いた。「ルドルフは何処です?」と彼は尋ねた。「彼は殆ど私達と一緒に朝食はとりません。」痛々しく顔を紅潮させて、奥様は答えた。それを見た彼はそれ以上何も言わなかった。そうして日々は過ぎ去り、ウリックの登場は光と太陽の輝きをもたらしたものの、夫妻間の不幸な関係には何も働きかけはしなかった。彼がそのことに言及することはなかった。彼は、私達の不思議な生活に次第に取り込まれて行くようだった。御二人のどちらにも彼は優しく愛情をもって接していたが、夫妻のよそよそしさについては出来るだけ無視し、どちらかに肩入れすることもなく、恐らくこうした状況下ではどんな人でもそうするのと同じように振る舞っていた。数日後、義理の弟が不思議に思い、戸惑っているだけだと知って奥様は立ち直った。

続いて起こった出来事をどのように語ればよいのだろう?この話にぴったりと合う甘く美しい言葉をどのように探せばいいのだろう?クリスマス・イヴに雪に覆われた牧場へと続く垣に凭れて星の輝く空に向かい、クリスマスプレゼントとして自分を愛してくれる誰かを御遣わし下さるように私は神に祈った。そして緑の葉が芽吹き、小鳥の囀る五月のこの陽光の下で私の願いは聞き届けられた。まるで、ある素晴らしい場所の門の外に立っていたようで突然それが開かれ、金の光がいっぱいに降りかかって来て私の目を眩ませた。最初はウリック・カルモアを博学な紳士と思っていただけであったが、それから最高にハンサムで高貴で優しい男性と見るようになり、最後に彼の前に出るとひどく影響されることに気付いた。彼の声を聞くとどうして心臓の鼓動が速まるのだろう?彼に見られるとどうして顔が赤らむのだろう?話しかけられるとどうして風に吹かれた木の葉のように私は震えたのだろう?彼の名を聞くだけでどうして全神経と鼓動が興奮を覚えるのだろう?私が彼を愛しているからだ、と自分の心が告げた。

私は心の中の愛を全て彼に捧げたが、見返りなどは思っても見なかった。彼を愛していられるだけで充分に幸せだった。過去や未来については考えたこともなく、今だけで充分だった。私の愛が押し付けがましいものでなかったのは神かけて本当のことだ。彼が見えるところに住み、彼が愛することの為に全力を尽くし、彼を愛して生き、彼の名を囁きながら死ぬ…それ以上に大きな野心や熱を込めた希望など私にはなかった。彼は他の男性とは随分違っているように思われ、彼のような人、彼と対等な人は居ないように思われた。彼が私を彼の隣に立たせる

などは有り得べからざる事のように思われた。そして子供だった心が情熱的な恋する女の心へと移り行く間に、美しい薔薇の月が訪れて、私は最早子供ではなくなった。どんなに私は彼を愛したことだろう！それも当然のことで、私は人生をまだほんの一部しか見ていなかった。彼はまさに私が初めて知り得た若くハンサムな男性であった。あの美しい六月は私の人生最良の時であった。他の人々の苦悩や悲しみを忘れたわけではなかったが、若い愛の夢の魔法はあまりにも強力で私の心はそれに占められてしまった。ウリック・カルモアは勉強と休養のためにウラメールを訪れて来たのであった。だが湖が一面に溶解した金のように見え、薔薇色の光が遠くの丘を照らす早朝に、私有地や湖のほとりに下りて来た彼の姿を、私は幾度見たであろうか！彼が私と話したくて下りて来たとは、微塵も思わなかった。奇妙なことに、全身全霊で彼を愛していることを生涯唯一つの秘密にしているという自覚が、彼の前での完全な落ち着きと、彼と一緒の時の完全な自信を私に与えていた。だから私達は早朝の数時間どっしりした木の下で話したり、鳥が周りで歌い、花が甘い香で見送り、朝日が後ろから照らす川岸を川下へと歩いたりした。ミスター・カルモアは私に話すことを好んだ。彼は朝食を常に奥様や私と共にとった。大きな枝を広げた木の木陰に私達が座っていると、彼は私達に本を読み聞かせるために午前中は非常に頻繁に訪れてきた。夕食後はいつも私達の後をついて客間に来た。散歩やドライブにも同行した。「事々に興味をお持ちの殿方がいらっしゃると、館の中がなんて楽しくなることでしょう！」と私はある日、不用意に奥様に言った。彼女の顔が青ざめるのを見た途端、私は自分の発言を後悔した。

ある朝、ウリックと私は薔薇に囲まれていた。彼は一枝折り取り、私に渡した。それはちょうど緑の葉の間からコケティッシュに覗いた愛らしい苔薔薇の蕾であった。「これが何の意味かわかりますか？」と彼は尋ねた。花言葉については何も知らなかった私は「いいえ」と答えた。「苔薔薇の蕾が何を象徴するか知らないのですか？」と彼は問い尋ねた。「探し当てると約束してください。」幸福な私の目が眩んだのは暖かい陽光のせいだったろうか？私は彼を見ることは出来なかった。薔薇の蕾を持って含羞んだ表情で私は逃げ去った。

第IX章

ミスター・カルモアの許から大急ぎで戻って来る時、私は奥様とぶつかりそうになった。私は謝ろうと立ち止まった。「そんなに急いで何処へ行くの？」と彼女は尋ねた。「分かりません」と私は答えた。「何処へ行こうとしているか分からないですって、ケイト？なんておかしなことでしょう！」確かにそうだった。燃える太陽の光のようにあまりにも素晴らし過ぎて、目を眩ます幸せから逃げ出そうとしていたことだけが私に分かっていた。奥様はわたしをしげしげと見て…彼女の凝視から顔を隠せるなら、私は世界も投げ出したであろう。「ああ、貴女の目に読み取れるものは何！それは何なの、ケイト」と彼女は言った。「何でもありません。」私は薔薇の蕾をやましげに隠そうとしながら答えた。「何でも無い？」彼女は繰り返した。「顔を上げて、

ケイト。私を御覧なさいな。」逃れる術は無かった。私は顔を上げて彼女を見た。彼女は私の目をのぞき込んで言った。「ああ、貴女の目にある光は未だ地をも海をも照らしたことの無い光だわ。何か分かる?」「いいえ」と私は答えた。「愛の光よ」と彼女は言った。「ああ、ケイト、何ー誰に与えられたの?」「陽光ですわ。」そして私は再び走り去った。花言葉を調べようと図書室に行ったのは勿論のことで、そこで私が読んだのは「苔薔薇のつぼみ…愛の告白」であった。ああ、今の私には微笑ましい。だがその時、それを読んだときは非常な、荘厳とも言える恐れが私を襲った。初めて聖地を訪れた清教徒のような感じであった。勿論、全ては何の意味も持たない、ただの冗談であったのだ。彼が私を愛するなんてありえないことだった。それでも彼がそんな事について冗談を言うとは、余計、思えなかった。そして彼の言葉の快い記憶が甦った。彼が見た中で私は最も綺麗な娘の一人だと彼は言ったのだった。私の心は何と高鳴るのだろう!どれほど私の魂が陽光と幸福に満ちているように感じたことだろう!こんな美しい世界で誰かが惨めだなんてありえようか?そして、氷の風のように奥様のことが思い出された。夫を愛して彼女はどう報われたか?クリスマス・イヴの祈りについて話したとき、彼女が何と言ったかを私は思い出した。それでも警告に注意を払わず、私は大切な薔薇の蕾を包み込んだ。嘗て一輪の小さな花が一人の娘をこんなにも素晴らしく幸せにしたことがあっただろうかと私は不思議に思った。次に奥様を見たとき、泣き過ぎでその顔は青ざめており、私達の間に起きたことが、彼女の心に苦く甘い記憶を呼び覚ましたのかと私は訝しがらずにはいられなかった。

＊　　＊　　＊

夕食が終わった。いつものように夫妻は完全によそよそしく、ミスター・カルモアが陽気に振る舞おうと努めるうちでの奇妙な張りつめた食事であった。どれほど逃げ出したく、どれほど日の明るさと花、新鮮な空気と戸外の自由とを求めていたことであろう!どのようにしてそれが起きたか私は説明することは出来ない。私はその夕をずっと金の霧を通して見ていたかのようだった。旦那様はある地所の仕事にかかりきって書斎に入り、奥様は姿を消していた。そしてウリックが私の許に来た。「ミス・フォスター」と彼は言った。「この美しい夕べを部屋に居て無駄にしてはなりませんよ。我々の主人夫妻は二人とも引き下がりました。日没前の最後の光を楽しみに行こうではありませんか。行きませんか?」私が?私の心は彼に向かって答えてしまっていた。私がお供できないところに彼が行けようはずがあったろうか?「この美しい夕べに帽子も外套も要りませんよ。」と彼は続けた。奥様の黒いショールが椅子の上に置かれていた。彼はそれで私の頭と肩をスペイン風に包み込んだ。「花々に彼らの女王様を見せてやりましょう」と彼は言った。「ミス・フォスター、気遣いや悲劇の全てを置き去りにしてあの世界を離れ、一時間だけ妖精の国を訪れましょう。」「妖精の国は何処にあるのですか?」と私は尋ねた。「我々が作りたいと望むところに」と彼は答えた。「湖の側に見つかるでしょう。」

満開で辺り一面に満ちていた木蓮の香を忘れることがあろうか?急降下するしらこばとの叫びや湖のほとりのナイチンゲー

ルの歌、湖上の金の光、美しい青い空、私達が踏み潰した花の香などを忘れ得ようか?丁度、香り高い大きな白い花をつけた木蓮の木の下に湖は小さな湾を形成していた。奥様はそれらを楽しむことが出来ないほど悲惨な状態で無い時には、楽しい空想に耽り、その場所を「木蓮の湾」と名付けていた。私はミスター・カルモアにそれを語り、その愛らしい思い付きに彼は微笑んだ。「そこを私達の妖精の国にしましょう。」と彼は言った。

そんな時間は生涯ただ一度のことであろう。ああ、そしてその時が私に訪れたのだ!湖の流れは緩やかにうねり、緑の土手に口づけていた。風は木蓮の花をかき混ぜていた。遠くまで続いた茶色の丘は、日没の光の中で今は金色であった。しばし無言であった私の恋人は、私の両手をとり、食い入るように眺めた。「ミス・フォスター、貴女は指輪を嵌めていませんね。」と彼は言った。「ええ、何も。マダムが私に母の結婚指輪を渡してくれたのですが、壊れてしまったのです。」と私は急いで答えた。「一言申し上げては失礼でしょうか?」と彼は続けた。「失礼だなどと決して思いませんわ。どんなことでも仰って下さい」と私は答えた。「エンゲージ・リングを嵌められていないということは、エンゲージしておられないと考えてよろしいですか?」「婚約の意味で仰っているのでしょうか?」と私はとても驚いて尋ねた。「ええ、婚約の意味です」と彼は言った。「あら、いいえ!どうしてそんなことが出来ましょう?私はずっと学校に居たんですのに。」「恋人はいなかったのですね?」彼は食い下がった。「ええ、いません」と私は答えた。「分かってはいました」と彼は言った。「ああ、ケイト、どんな女性の瞳でも恋人に見入られた後は以前と変わってしまうものなのです!貴女の瞳は明けの明星のように澄んでいる。恋人がのぞき込んだことの無い瞳だ。ケイト、その瞳を私に。」だが、そうする代わりに私は両手に顔を埋めてしまった。鳥が歌い、さざ波は穏やかに土手にうち寄せていたが、その歌や波の音よりも私に地上の全ての音楽を運んで来るその声を私は聴いていた。「苔薔薇の蕾が何を意味するのか分かりましたか?言ってください。分かりましたか、ケイト?」「はい」と私は殆ど聞き取れないような声で囁いた。「私は貴女に一目で恋をしました」と彼は告げた。「貴女を見たとき、貴女は湖の側の此の場所に座っていました。御自身の顔の魅力を貴女は御存じ無いのでしょう。世の男性たちの中にいれば、貴女は早すぎるほど早くそれを知るようになるでしょう。兄が館での新しい出来事について何も語っていなかったので、私には貴女が誰か見当もつきませんでしたが、これまで見た中で最も美しい少女だと思いました。そして、ケイト、あの最初の瞬間から私の心は貴女に注がれて来て、決して離れることはありませんでした。何日も前に話したいと思いましたが私はためらっていました。貴女はそうしたこと全てにとても無関心に思われたのです。愛についての悩みで貴女を煩わせることは、ある美しい聖域に踏み込むような気がしたからです。でも、幸せになれるものならどうしてそうなってはいけないことがありましょう。ケイト、愛しています。私の妻になって下さい。」これが私の祈りへの答えであった。「ケイト、貴女をとても深く強く愛している私の命を貴女に捧げましょう。私の愛に応えてくれますか?」

私が既にどんなに深く愛していたかは神のみが御存じであった。だが、彼が私と結婚することは気違い沙汰に思われた。彼が喜んでそう呼ぶ美しさと愛する心の他に、私は何も持っていなかった。私には財産も地位も人との繋がりも無かったが、確かにこれら全ては彼に必要なものと思われた。自分のためにはならないことは出来ないであろうことを、私は彼に告げた。彼は笑って、自らを最高の判事―審判官と名乗った。彼は私を愛しており、他に重要なことなど何も無かった。彼の声を初めて耳にした瞬間からどれほど彼を愛していたかなど、私は彼に全ては話さなかった。いくつかの些細な事柄は彼にさえも秘密にしていた。私達は湖の側で婚約し、こわされることなく続く結婚の誓いを交わした。

彼の妻に！このような言葉を耳にするなどと望んでもみなかった！彼への愛は全く控えめな気持ちのものであったのだ。「心に喜びを与えてくれると同じく、貴女は私の目をも楽ませてくれるのですよ、ケイト」と私の恋人は語った。「貴女はいつも何か美しい隠れた音楽を思わせます。私を愛していると言ってくれますね、ケイト？」「ええ、愛しています」と私は答えた。「それでは私の妻になると約束してくれますね？」「ええ、本当にお望みならば。」「願わくば、ケイト！私は貴女の最初の恋人でしょうか？」「そして最後の恋人ですわ」と私は切に言った。「そう信じていました。貴女の美しい瞳に眺めいった恋人は無く、貴女の唇に接吻した恋人は無いことを…それらが真実であるというように美しいその唇に！私が最初の接吻をしても…？」そしてその場所で、日没の夕刻の輝きの中で彼は初めての口づけをし、その接吻は私の心を彼に永遠に結びつけた。

どれほど時間が経ったか私達が気付く前に、湖を冷たい灰色に変えて陽が沈んだ。鳥達は皆巣に帰り、私達が館に戻ろうと立ち上がった頃には自然の全てが休息しているようであった。「ミスター・カルモア」と私は語りかけた。「もう『ミスター・カルモア』はやめてください、ケイト。私の名はそれほど音楽的ではありませんが、貴女はそう呼ぶように努めねばなりませんよ。私に話しかけるときはいつもウリックと呼んでください」と彼は言った。「ウリック」と私は恥ずかしげに呼びかけた。「今はまだ誰にも話さないで下さい。まず慣れさせて下さい。」「お望みのままに。でもほんの短い間だけですよ」と彼は言った。そして窓から誰でも私達を見ることができるほど館の間近にいたにも関わらず、彼は実に再び私に口づけたのだった。

（以下次号）

注

（1）原文ではtwoであったが文脈上、不自然であったため、パンフレット版のtooを採った。

（2）原文が二行欠落しており、パンフレット版No. 1460より補った。

（3）ここでは爵位を持たないという意味でミスターの称号を用いたと思われる。